

人形姫

山本幸久

第八回

8

静かだ。

森岡人形の社長室はしんと静まり返っていた。服の擦れる音やソファの軋む音、咳払いや涙を啜る音など、日々の暮らしでは気にならない音が、やたら耳につくほどである。そんな中、カタカタ、カタカタという音が聞こえてきた。なにかと思ったら、ソファに座る宮沢がビンボー揺すりをしていたのが見えた。

いま、ここにいるのは森岡人形五代目の森岡恭平、頭師の宮沢と峰、髪付師の久佐間、手足師の熊谷父子、小道具師の阿波三姉妹、着付師の遊木、経理部長の幸田、そして大学院の卒業が決まり、三日後には晴れて正社員となる溝口真純、総勢十二人だ。

それぞれ接客用のソファか、隣の事務室から持ってきたキャスタ

―付きの椅子に座っている。恭平だけは立っていた。社長用の肘付き椅子に座ると、社長用のどでかい机が邪魔というか、みんなと距離ができてしまうし、なによりもエラそうなため、その机にお尻で寄りかかる姿勢でいた。

みんなの視線はすべてホワイトボードにむけられていた。そこにいま、二枚の紙が貼ってある。いずれも男女の顔が描かれていた。
男雛おびなと女雛めびなだ。むかって右のイが宮沢、左のロが溝口の描いたもので、来年の雛人形の新作案なのだ。

例年は宮沢が提案したのを元にして、職人達が話し合いをおこなうだけだ。ところが今年はちがう。溝口真純が私も案をだしてイイかと、宮沢に直訴したのである。

この私と競いあおうとは、いい度胸をしてるじゃないかと宮沢が言うのと、度胸だけじゃありません。自信もありますと溝口は言い返したらしい。売り言葉に買い言葉とはまさにこのことだ。

恭平が思うに、溝口はわざと喧嘩を売ったにちがいない。怪我や家族のことでショボクれていた宮沢を奮い立たせるためである。実際、彼は自宅で丸二日かけて、雛人形の新作案を描いていた。

かくして三月最後の金曜の今日、こうして社長室に集まり、宮沢と溝口、いずれの男雛女雛を来年の新作にするかを決めることに相成ったのである。

並べて比較すると、意外にも宮沢のほうが、いまっぽい。女雛は孫娘を、男雛はその孫娘がファンだというジャーニーズの男の子をモデルにしたせいだろう。このことを恭平は宮沢本人に聞いている。

とはいえ溝口のが古めかしいわけではない。高貴な雰囲気を漂わせてはいるものの、口元に穏やかな笑みを浮かべる表情は、愛らしさと親しみやすさを感じられた。しばらく見ているうちに、恭平は父親の雛人形を思い出した。筆のタッチがよく似ているのだ。新作とは言え森岡人形の伝統は守るべきと考え、恭平の祖父や父のを参考にしたとも考えられなくもない。

どちらがどちらなのか、描いたふたり以外に知っているのは恭平だけだ。今朝方出社した際に、宮沢と溝口から絵を受け取った。そして事務室からホワイトボードを社長室へ移動し、そこに二枚の絵を貼ってから、みんなを呼び寄せた。そしてどちらが来年の新作として相応ふさわしいか、いまこの場で多数決を取って決めたいと言ったのが、およそ三十分ほど前である。

驚きの声があがり、しばらくはざわついたものの、異議申し立てをする者はいなかった。宮沢と溝口、そして恭平以外の九人で無記名投票ということで、みんな納得し、とりあえず二十分間のシンキングタイムを与えた。ところが二十分経ったところで、もうちょっとイイですかと峰が言い、さらに十分延ばした。それもじきにおわ

ろうとしている。

溝口はドア近くでキャスター付きの椅子に座っていた。時折、スマートフォンをいじくることはあっても、至って落ち着いたものだった。翻ひるがえって宮沢ときたらどうだ。ソファに座っているのだが、まるで落ち着きがない。額に汗を滲にじませ、しかめっ面のままだった。この静けさが耐えられないというのもあるかもしれない。そしてしまいには怪我をしていないほうの足で、ビンボー揺すりをはじめたのだ。

そしてホワイトボードから視線を外し、ひとりひとりの顔を窺うかがっている。恭平などは目があい、睨にらみつけられてしまった。あんたがこうしろって言ったんでしようが。

宮沢から恭平のスマートフォンに電話があったのは、昨日の昼間である。どこか具合が悪くなったり、家の中で転んだりしたのかと思いきや、そうではなかった。溝口の新作案はできたのかと訊ねてきた。彼女も仕事場にいたので早速、訊ねたところ、今日明日には完成するとのことだった。

ならばどうでしょう、五代目。明日にでもどちらが新作に相応しか、みんなに選んでもらいませんか。

電話口でそう言った宮沢は自信満々の口ぶりだった。

そして今日、宮沢はひさしぶりの出社で、歩けるようにはなった

とはいえ大事をとって、恭平自らが車で迎えにいった。

満場一致で、私の案に決まるのは目に見えていますかね。ここは心を鬼にしようと思うんですよ、私は。若いひとにとって、挫折ざせつも勉強のうちでしょう？

そう言いながらニヤつくくらい、本社までの車中でも、宮沢は余裕綽々しゃくしゃくだったのだ。ところが溝口の絵を見た途端、一変してしまった。それはつまり宮沢自身が、溝口の実力を認めたことに他ならなかった。

宮沢のだって、けつして悪くない。むしろ従来の森岡人形とうしゅうを踏襲したような溝口よりも、新作としてはアリだと恭平は思っているくらいだ。こんなことならば多数決などせずに、それぞれの案をきちんと吟味ぎんみして、話し合いで決めればよかったと思わないでもない。だがもう遅い。

ポッポオ、ポッポオ、ポッポオ。

恭平が生まれる前から社長室にある鳩時計から、午前十時を報しらせるために、鳩があらわれて鳴きだした。シンキングタイム終了だ。

「それでは投票を」

「その前に一言」恭平の言葉を宮沢が遮かざった。「念のために言っておくが、イが私、ロが溝口さんだ」

恭平は我が耳を疑った。

どうしてバラす？

他のみんなもおなじことを思ったはずだ。それを代表するように
阿波三姉妹の長女、須磨子すまこが言う。

「なんでそれ言っちゃうの？」

「なんでって」宮沢はしかめっ面をさらにしかめる。「念のためと
言っただろ」

「そんな念、必要ないでしょうが」

着付師の遊木が呆あきれている。だがその隣で髪付師の久佐間がしき
りに頷うなずきながら、こう言った。

「そうだったんですね。俺はてっきり逆だと思っていたんで、危あや
くろに入れるところでした。危ない危ない」

いやいやいやいや。

「なにが危ないもんですか」須磨子が鋭い声を飛ばす。

「ロがいいって決めたんでしょ？」二女、勢津子せつこだ。

「だったら口に投票すればいいだけのことよ」これは三女の多香子たかこ
である。

ソファに並んで座っていた三姉妹はぐいと前のめりになる。ちよ
うど目の前に久佐間が座っていたのだ。

「た、たしかにロがいいとは思いましたよ」三姉妹に気押されなが
らも、久佐間は言い返した。「でもイが宮沢さんだとわかったいまは、

イに投票するのが世の道理でしょう」

「どんな道理ですか」遊木が眉間に皺みけん しわを寄せる。

「四代目が亡くなってこのかた、十年間ずっと宮沢さんの案でやってきたのに、まだ社員にもなっていないペーパーの子のが採用されたら、おかしくないですかってことを言いたいですよ、俺は」

「でもそのペーパーの子の、おっと失敬」遊木は溝口にペこりと頭を下げる。「溝口さんのであるロがいいと決めたのであれば、ロに投票することこそが世の道理でしょう」

「だからそれはロを宮沢さんのと勘違いしたからに過ぎません。なんであれ私は宮沢さんの案に票を入れたいんだ。そのどが悪いって言うんですか。私にはさっぱりわからない」

久佐間は居直った。いや、このひとは本当に自分の意見が正しいと思っているのだ。これ以上、なにを言ったところで無駄だろう。

「いかがなさいますか、五代目」訊ねてきたのは経理部長の幸田だ。

「宮沢さんのせいで妙な具合になってしまいましたけれど、投票はしますか」

「なんで私のせいなんだ」宮沢が不服そうに言う。

「ぜったいあなたのせいでしょうが。」

「溝口さんはどうですか」

幸田が言うと、みんなが一斉に溝口のほうを見た。彼女は顔色ひ

とつ変えずに、こう答えた。

「私はいつこうにかまいません。どっちが描いたかなんて隠すこともないと思っていましたし」

「そうさ。なんで隠したんですか、五代目？」

「それは」

久佐間に言われ、恭平は言葉を濁す。横目で宮沢を見たが、彼は知らん顔だ。

やれやれ、まったく。

「では投票を」恭平が言った途端だ。

「あの」また邪魔が入った。今度は頭師の峰だ。宮沢が座るソファの斜めうしろで、キヤスター付きの椅子に座っていた。鳩時計のちようど真下で、丁寧にも右手を挙げている。「意見があるのですが、いいですか」

「どうぞ」

恭平は驚きながらも促す。峰が意見を言うなんて、滅多にないことだ。事なかれ主義で影が薄く、自らを主張するタイプではないのだ。少なくともこうした会議の場で発言することは、いままでなかったように思う。そもそもが、あがり症なのだ。そのせいで即売会や小学生の見学の際、手が震えて作業ができなくなってしまうほどだ。いまも少し声が擦れ、目蓋が震えている。

「久佐間さんの話を聞いて思うところがありました」

「峰さんもやはり、俺とおんなじで、口のほうを宮沢さんのだと思っただけでしょう？」

「そんなことはありません」いきなり口を挟んできた久佐間に、峰はぴしゃりと言った。これまた温厚な彼には珍しいことだ。「宮沢さんとは四十年いっしょに働いてきたので、絵のタッチくらいはわかりますよ。すぐにイだと気づきました。ただし今回は宮沢さんらしさが欠けていて若者に媚びているような感じで、私の好みではありません」

宮沢が姿勢を変えて峰に顔をむけ、睨みつける。しかし峰は怯むことなく、話をつづけた。

「とはいえ溝口さんのほうは三代目や四代目のコピーみたいでオリジナリテイが皆無に近い。わざわざ新作として売りだすまでのものではないと思います」

「ずいぶん手厳しいじゃないの」

そう言いながら須磨子はニヤついている。妹ふたりもおなじ表情だ。面白がっているにちがいない。なるほど、峰の意見はそれこそ道理が通っていた。まったくの正論と言っている。溝口を見ると、さすがの彼女も顔を強張らせていた。少し目が吊り上がっているのにも、恭平は気づく。それだけではない。

「どっちも駄目って言うなら、どうすべきだと峰さんはお思いなんですか」

溝口は言った。言葉には明らかに怒気どきが含まれている。こんな彼女ははじめてだ。部屋の空気が一瞬にして、ピリツとする。

「さつき久佐間さんが言ったように、四代目が亡くなってこのかた、ずっと宮沢さんの案でやってきました。それが今回いきなり、まだ社員でもない溝口さんが案をだして、そのどっちかを選べというのは、やはり納得がいきません」しゃべっているうちに、峰の鼻息が荒くなっていく。「だったら私も新案をだします。どうですか、五代目。駄目ですか」

「駄目だなんてそんな」

予想外だった峰の発言に、恭平は戸惑いを隠せなかった。なぜいまそれを言うんだと思いつつ、ひとまず聞き返す。

「お描きになったものがあるんですか」

「いままで描きためたものが家にあります」峰の顔は上気して真っ赤になっている。「その中から出来のいいモノを選んで、さらに改めて描いてきます」

「描きためていたってどのくらい前から？」恭平が重ねて訊ねた。

「こちらに勤めてからずっとです」

「四十年ってこと？」「そんな話、いままでしたことないじゃない？」

「だれか聞いたことある？」

阿波三姉妹がつづけざまに驚きの声をあげた。

「だれにも言ったことはありません。ただどいつかきつと、自分が考えた雛人形をつくりたいと思いつづけていました」

そんな思いを峰が胸に秘めていたとは。

意外というか、考えたこともなかった。いままで峰が頭のプロタイプを彫ったことはいくらでもある。でもそれは宮沢の描いた男雛女雛だった。

「どれくらいで描いてこられます？」もちろん新案だ。

「一週間、いえ、五日もあれば」

「おふたりはどうですか。峰さんが参戦するのはかまいませんか」

「ああ」恭平の問いかけに、しかめっ面を崩すことなく宮沢は答える。

「べつの案をだしてもいいですか」溝口が言った。さきほどよりだいぶ怒気は薄れてはいたものの、喧嘩腰の物言いだ。目が吊りあがっていてもいる。案外、負けず嫌いのようだ。宮沢を焚き付け^たるつもりではじめたことが、彼女自身も燃えてきたのかもしれない。「三代目や四代目のコピーみたいでオリジナリテイが皆無に近いようなものじゃ、どっちにしろ採用されないでしょうし、描き直してきます」「だったら俺もだ」宮沢が呻^{うめ}くように言う。

「では来週の水曜、時間は今日とおなじでいいですか」

恭平は一同を見回す。すると熊谷が手を挙げた。父親の道隆みちたかのほうだ。

「ひとつ提案があるんだ。昨日、夕飯ゆふたかのときに良隆と話したことな
んだけど」

「俺と？ なに話したっけ？」

「九人で投票して決めるのは、無記名でもあとあと揉めるんじゃないかって、私が心配していたら、おまえが言っただろ、あれだよ」

「ああ、あれね」

「なんだ、あれって」恭平は息子の良隆に訊ねた。

「もっと大勢のひとに投票してもらえば、揉めないんじゃないって言ったんです。たとえば小学校の子ども達とか、市内の商店街やショッピングモールのお客さんとか、あとはまあ、ウチのホームページでやっていいかな。ただ単に投票してもらうだけじゃなくて、採用された案に投票してくれた方の中から抽選で何名かに、雛人形をはじめ、ウチの商品をプレゼントするんです」

「ウチの息子にしちゃあ、マトモな意見だと思いませんか？」

「我が社の宣伝にもなりますしね」恭平は頷いた。「なにせ来年は創業百二十五周年ですからね」

そうなのだ。創業記念のパーティーを開きませんかと言いだした

のは良隆である。フィギュア事業部と接点を持ちたいという邪よこしまな考えからではあるものの、たしかに会社ゼンたいの活性化になると恭平は思い、自他ともに森岡人形の大番頭と認める幸田に、創業何年になるかと訊ねたところ、今年で創業百二十四年だったのだ。ならば区切りのいい来年にむけて、パーティーだけでなく、なにかでさかないかと考えていたところなのだ。じつに都合がいい。

宮沢が自分の描いた絵をバラしたときは、どうなるかと思ったものの、そのおかげで峰の本心も聞けたし、投票をイベント化し、創業記念の宣伝もできるアイデアもでてきた。物事がイイ方向へ転んだのは間違いない。いつもの会議はなかなか意見がでずに、時間だけが過ぎていくことのほうが多いのだ。

「なにか他に意見があるひと、いませんか。新提案のことに限らず、なんでもかまわないのですが」

恭平がそう言うと、どこからか嗚咽おえつが聞こえてきた。久佐間だ。いつだったか親父が夢にでてきた話を宮沢にしていたところ、近くにいた久佐間が、おいおい泣きだしたことがあった。情に脆もろいというか、感激屋なのだ。しかしいまの流れで、どこに泣くポイントがあったのか、よくわからない。

「えらいっ」頬を涙に濡らしながら久佐間が叫ぶ。「そうやって自分を抑え、四十年間我慢しつづけてきたなんて、峰さん、あんたはえ

らいつ」

そのくだりはもうおわったでしょうが。なんで蒸し返しちゃうわけ？

恭平がそう思っていると、幸田が鼻で笑った。

「そのどこがえらいんだって言うんだ。四代目の頃は難しかったかもしれないけど、宮沢さんにだったら、今回の溝口さんみたいに、自分にもやらせてくださいと言えばよかったですでしょうが。ですよね、宮沢さん」

「うん、まあ」

なんとも歯切れの悪い返事である。

今回は溝口がウマイ具合に挑発したからこそできたのだ。峰がお願いしたところで宮沢は承諾しないだろう。もしかしたら峰の申し出を宮沢が駄目だと封じたことがあったのかもしれない。

「だ、黙れっ」峰はすつくと立ち上がると、幸田を指差した。「三年やっても、ろくすっぽ仕事がおぼえられずに破門されて、いくところがないって、俺に泣きついてきたのは、ど、どこのどいつだっ。え、えらそうな口きくなっ。お、俺がいっしょに、四代目に頭を下げてやったから、おまえは経理として会社に残ることができたんじゃないかっ」

マジか。

幸田が職人としてモノにならず、事務方に移されたのは知っていた。だが破門云々は初耳だ。酒席でもでたこともない。よほど痛いところを突かれたのだろう。幸田は蒼白になり、二の句が継げない状態になっている。

「峰さんったら、三十年以上も昔の話を蒸し返さなくってもいいでしょう？」宥めるように須磨子が言う。

「だれにも触れられたくない過去があるわ。若いひとのあいだでは、そういうのを黒歴史って言うんですってよ」つづけて勢津子だ。

「幸田さんも幸田さんだわ。峰さんは宮沢さんに遠慮していたわけだし、そんな言い方をしなくても」最後に多香子がそう言ったときである。

「ぎいいいいいいっ」

この世のものとも思えぬ奇声をあげ、幸田が峰に飛びかかった。「なにやってんですか、幸田さんっ」恭平は慌てて止めに入る。「落ち着いてっ」

「なんだ、やるっていうのか」幸田に胸倉を掴まれながら峰が怒鳴った。

「峰さんもやめてくださいっ」恭平としては幸田を羽交い締めにしたところだが、暴れていて思うようにいかない。思いのほか、力があるのだ。

「いつそのこと表で決着をつけさせたらどうです？」遊木はまるで他人事だ。

「だったら峰さん、俺、助太刀しますよ」久佐間が余計なことを言いだす。

「莫迦なこと言わないでください。良隆、見てないでなんとかしろ」

「あ、はい」良隆だけでなく、父親の道隆も幸田と峰を引き離そうとする。

イイ歳をしたオトナ達がしばらく、くんずほぐれつ、入り乱れていたところだ。

「危ないっ」

三姉妹のうちのだれかが叫んだ。と同時に恭平の頭のとっぺんになにかが突き刺さった。いや、本当に突き刺さっていれば命はあるまい。だがそれくらいの痛みだったのだ。どたんばたんがたと恭平の足元に落ちたのは鳩時計だった。どうやらその角がぶつかっただけらしい。

ポッポオ、ポッポオ、ポッポオ。

鳩が飛びでて、助けを求めるように鳴き叫ぶ。できれば救ってやりたいところだが、恭平はあまりの痛みにも両手で頭を押さえ、その場にしゃがみこんでしまった。

「社長っ」「五代目っ」「社長さんっ」

もう嫌だ。

いろいろぜんぶ嫌だ。

「はい、森岡人形ですが」

頭のとっぺんにタオルで巻いたアイスノンを押しつけながら、恭平は電話にでた。会議をおえてすぐ、幸田は出資先の信用金庫にでかけてしまったのだ。

「わたくし田島たじまと言いますが、森岡恭平さんはいらっしゃいますか」

「私ですが」女の声だ。でもだれだ、田島って？ 会社名を言わないのも引つかかる。

「あ、森岡くん？ あたしい。わかるう？」

わからない。しかし聞き覚えのある声だ。なんとか思いだそうとするが、できなかった。鳩時計の一撃を食らってからまだ三十分ほどしか経っておらず、ずきずきとした痛みがまだ少し残っているのだ。

「すみません、ちょっと」

「冷たいなあ。でも高校卒業以来、会ってないからしょうがないかあ。森岡くん、同窓会もこないもんねえ」

そう言われ、恭平ははたと気づいた。小中高と学校がおなじで、

高二の夏から秋にかけて、三ヶ月だけつきあった子だったのだ。その名字を言ってみたところだ。

「覚えててくれたんだあ。ありがとう」

「ひさしぶり」二十年近くは会っていないはずだ。

「だよねえ。町中で何度か見かけたことはあるのよお。でも旦那や子どもといっしょなもんだから、声かけづらくってえ」

結婚をして、名字が田島になったにちがいない。

「会社、継いでたんだね」

「うん、まあ。十年近く経つけど」

「うっそ、そうだったんだあ。全然知らなかったあ。こないだ、ウチの娘が森岡くんの会社に見学にいったのよお。そんなときはじめて知ったんだあ。そうなんだあ。見かけたときは里帰りしてるんだと思ってたんだけど、そっかあ、十年も前からこつちにいるんだあ」

会社見学の際、見覚えのある子がいたのを思い出す。テレビで見た子役のだれかに似ているからかと、そのときは思ったが、元カノに似ていたのだ。いちばん熱心に話を聞いていた彼女にちがいない。

「でも森岡くん、東京に住んでるときに結婚してるはずだよねえ」

東京に住んでいたのは大学の四年間だけだ。小田原おだわらの会社に就職し、住まいもおなじ場所だった。でもいちいち訂正はしなかった。

「こつちにくる前に別れたんだ」

「え？ あっ、なんかごめえん」

恭平は思わず笑ってしまう。その言い方が高校時代と変わらなかつたからだ。

「なんか用？」

「そうだった、懐かしくて余計なおしゃべりしちゃって。ごめんね、仕事中に」

「だいじょうぶ」 実際、仕事はしていなかった。

「ウチの娘がね、今日、森岡くんの会社にいくって言ってるのよお。

いま学校で、終業式だから、じきに帰ってくるんだけどさあ。お昼食べたあとで一時間くらいになると思うんだけどどうかなあ。いい？」

「かまわないけど、なにしにくるんだろ？」

「森岡くんの会社ってさあ、日本人形だけじゃなくて、フィギュアもつくってるんだって？」

「ここではやってないよ。弟に任せてる」

任せてるわけではない。弟が独自にやっているのだ。つまりぬ嘘というか、見栄を張るものだと、恭平は自分に呆れる。

「フィギュアの部署は代官山だいかんやまにあるのよね。凄いじゃん。『オバケデイズ』の食玩をつくってるくらいだから、儲かっているんでしょ」

「たいしたことないさ」

儲けているのは弟だ。話をしているうちに虚しくなってきた。

「でね、ウチの娘は、その代官山のオフィスを見学したいらしいの。そのお願いをしにいくそうよ」

「娘さん、『オバケデイズ』が好きなんだ」

「じゃなくて、友達で好きな子がいて、頼まれたの。ウチの娘、あたしとちがって出来がよくて、学級委員長なんかしてて、クラスメイトに頼りにされてるみたい。なんかその子もいっしょにいくって言ってたわ。代官山のほうも見学とか平気？」

「きみのためなら、どうにかするよ」

「高校んときとおんなじこと言ってる」

高校んときにこんなことを言っていたのか。恭平自身、覚えていない。だが当時の元カノとの思い出が、あたかもフラッシュバックのごとく脳裏に浮かんでは消えていき、胸が熱くなる。

「私のためじゃなくて、娘のために頼むわ。よろしくね。それじゃ」

感傷に浸る恭平とは正反対に、元カノはあっさり電話を切ってしまった。彼女にすれば用事が済んだのだ、当然である。それでも少しは昔話に花を咲かせてもよかったのではないかと、恭平は残念に思う。なんだったら、今度メシでもいこうと誘ってもよかったのだ。

いやいや、元カノは人妻だ。過去は過去、いまはいま、それぞれの人生を歩んでいる。だいたい焼け木杭ほつくいに火が付くようなことがあったとしても、いまの恭平は男として使い物にならない。これでよ

かったのだと自分に言い聞かせ、受話器を置いた。

「だいじょうぶですか、キャプテン」良隆が心配げに訊ねてきた。
「無理しないでくださいよ」

「わかってるって」恭平は短く答えた。鳩時計にやられて三時間近く、頭のとっぺんは触れなければ痛くないくらいまで治まっている。
「でもやっぱ、こういう過度な運動は避けるべきだと、俺は思いますけどねえ」

「うっせえな。だいじょうぶだって、言ってるだろ」

かねつき 鐘撞高校ボート部の練習に参加してからは五ヶ月、恭平の体重は七キロ減って、腹もだいぶへこ凹んだ。相変わらず食事はコンビニのモノが中心だが、以前のようなソースカツ丼とか唐揚げ弁当とかチーズハンバーグ弁当といった揚げ物や肉類はなるべく避けている。
今日は豆腐ハンバーグときんぴらサラダの玄米弁当だった。

これを会社の事務室で食べおえたあと、会社のすぐ隣にある自宅でTシャツと七分丈のパンツに着替えてから、北側にあるガレージにむかった。車が二台並んで置けるようになっていたが、いまは恭平の自家用車しかない。空いた一台分のスペースには、ローリングマシンを置いていた。恭平はいま、それを漕いでいる真っ最中なのだ。

三ヶ月後に開催される関東マスターズレガッタに、ダブルスカルで参加することになった。誘ってきたのは良隆で、いっしょに漕ぐのも彼なのだ。目標ができるかと恭平は俄然、やる気がでてきた。そこで思いだしたのが、このローリングマシンだ。高校の頃、自宅でもローリングができるよう、お年玉で買い求めたもので、十日ほど前に物置から引っ張りだすと、毎日朝昼晩かさず漕いでいる。出先から戻ってきた良隆にローリングマシンを漕いでいるところを見つけたのは、先週末のことだった。

隠れてローリングなんてずるいですよ。

べつに隠れてやっていたわけではない。良隆に言う機会がなかっただけだ。つづけて彼は、俺にもやらせてくださいと言ったもの、いままでガレージにきたことは一度もない。今日訪れたのも、ローリングマシンをするためではなく、恭平の様子を見にきただけらしい。

「それよりおまえ、一般のひと達に新作案を投票してもらおうっていうアレ、なんかアテがあるのか」

はじめてから五分も経っていないが、恭平はすでに汗だくだった。息苦しくはあるが、話すことはかろうじてできた。

「アテって言いますと？」

「商店街とかショッピングモールとかに、そういったことをお願い

できる知りあいがいるのかってこと」

「地元の友達を辿^{たど}っていけば、だれかしらいると思うんですよねえ。ちよつと見つけてみます」

「頼んだぞ。それと」

「まだなにか」

「やってかないのか、これ」

これとはもちろんローリングマシンである。

「やってもいいんですけどね。午後は外回りなんで」良隆はスーツ姿だった。「ワイシャツを汗でびっしりにするわけにもいかないのだ」

「そういやコイツ、高校んときもろくにトレーニングしないで、^{しやう}鐘^きに叱^きられていたな。

腕立て伏せや腹筋の数をごまかすのもウマいものだった。よくもまあ、こんな男が現役のコーチをしているものだと思う。

「シャツとかウェアとか貸してやってもいいぞ」

「でも仕事に差し障りがでたらマズいでしょう。今度にしますって」これ以上無理強^じいするのもどうかと思ひ、恭平は口を閉じた。するとそのときだ。

「ごめんくださいああい」

子どもの声が聞こえてきた。ひとりではない。何人かで声を揃わ

せている。

「キャプテン、見学にきてた子達みたいですよ。三人だけですけど」

ガレージをでかかっていた良隆が言う。彼の立つ位置からは会社の玄関が見えるのだ。

「俺の客だ」約束の一時にはまだ少し早い。でも間違いない。漕ぐのをやめて立ちあがる。「良隆、まだでかけないだろ。俺、家で着替えてくるんで、そのあいだけ、子ども達の相手、しててくんないか。会議室に通して、お茶だしてくれればいいから」

だが良隆に頼むまでもなく、べつのひとが子ども達をむかえていた。その声が聞こえてくる。

「いらつしやあい。今日はどうしたのお」

溝口だ。

三人の子どもは溝口の案内で、社長室に通され、さきほどの会議では阿波三姉妹が座っていたソファに畏かしこまっている。いずれも緊張おもの面持ちだ。

「今日はお忙しいところ、私達のために時間を割いていただき、マコトにありがとうございます」

恭平がむかいのソファに座るなり、そう言ったのは左端の女の子だった。ぎこちないが一言ずつはつきり言おうと頑張っているのが

よくわかる。会社にくるまでに、練習をしてきたのかもしれない。
そんな彼女に恭平は少なからず好感を持った。

「それほど忙しくなかったから、だいじょうぶだよ。えっと、きみが田島さん？」

「は、はい。そうです」見れば見るほど元カノによく似ている。どこがいちばん似ているかと言えば、目がぱっちりときなところだった。

「お母さんから電話をもらったよ。だいたいの話は聞いてるんだけど」

「ぼ、ぼく達、明日から春休みなんです」真ん中の小太りの男の子が話しはじめた。この本社で『オバケデイズ』の食玩をつくっていると勘違いしていた子にちがいない。「それであの、春休み中に代官山にあるとおっしゃっていたフィギュア事業部を見学しに行くことはできないかと思って、お、お願いにきました。ど、どうでしょうか」

「お願いする前に、自分の名前を言わなきゃダメだろ」

小太りの子の隣で、見るからにイジメっ子っぽい男の子が注意する。

「あ、そうだった。ぼくは井上」

「アイサツをするときは立ってしなくちゃ」

今度は田島さんだ。そして三人は一斉に腰をあげる。恭平もだ。子ども達の生真面目ぶりに、思わず笑ってしまいそうになり、唇を噛んで堪えねばならなかった。

「ぼくは井上ケンタです」「荒川ユウジです」「田島メイです」

「森岡人形の森岡恭平です」と言ってから、ひとりひとりに名刺を渡す。

「名刺もらったの、はじめてです」「オトナになったみたいだな」「一生大事に取っておきます」

名刺だけで、こんなにも喜んでもらえるとは思ってもしなかった。恭平は口元が綻ほころんでしまう。そこへ溝口があらわれた。子ども達のために飲み物とお菓子を運んできたのだ。

「鈴カステラだ」すぐさま井上くんが手を伸ばす。

宮沢が話していたとおり、コンビニで売っていたのだ。豆腐ハンバーグときんぴらサラダの玄米弁当といっしょに、子ども達のためにと買い求めていたのである。

「いただきますって言うってから食べるべきよ」

田島さんがそう言ったときには、井上くんの口には、すでに鈴カステラが入っていた。

「きみもいてくれないか」立ち去ろうとする溝口を、恭平は呼び止めた。子ども三人の相手を自分がちゃんとできるか、いまいち自信

がなかったからだ。「この子達、フィギュア事業部へ見学にいきたい
つて、お願いしにきたんだ」

「あ、そうだったんですね」溝口は恭平の隣に座る。「見学のときに、
『オバケデイズ』の食玩の話をしていましたもんね。みんな、『オバ
ケデイズ』が好きなの？」

「俺はべつに、そんなでもないんですけど」

荒川くんが真っ先に答える。

待て待て。溝口さんがフィギュア事業部のバイトで、『オバケデイ
ズ』の食玩をちよつと手伝ったことがあると聞いて、いちばんに反
応をしていたのはきみだったはずだぞ。

「コイツがけつこう集めてて」

『オバケデイズ』の食玩だけじゃありません」荒川くんはコイツと
言われた井上くんが話します。「森岡人形でつくってる食玩はどれも
出来がすばらしくて、どうしてもほしくて、コンビニやスーパーだ
けじゃなくて、ネットの通販でも買ってます」

昔の慎次しんじみたいだな、と恭平は思う。類は友を呼ぶわけだ。

「いま、弟に電話してみるよ」

恭平はスマートフォンを取りだし、画面をタップしてから耳に当
てる。

「ほんとでふか」

驚きの声をあげると同時に、井上くんの口から鈴カステラの^{かす}滓がこぼれた。

「きつたねえな、おまえ」荒川くんが叱りつける。「話すか食べるか、どっちかにしろよ」

「じ、めん」

「もしもし」三回半の呼びだし音で弟の慎次はでた。「なに？　なんか急用？」

マズい。弟の不機嫌そうな声を聞いて、恭平はいささか後悔した。「急用でもないんだがな。おまえ、いま、どこにいる？」

慎次は東南アジアの某国にいた。政府関係者との交渉はなかなか条件が揃わず、未だ成立していないため、この一ヶ月ばかりはむこうと日本を行き来している状態なのだという。

とりあえずフィギニア事業部を見学したい小学生について切りだしてはみたものの、弟の反応は鈍く、返事も面倒くさそうだった。このままでは断られてしまうかもしれない。子ども達三人だけでなく溝口にまで、じっと見つめられ、恭平は焦った。

「いきなりそんなこと言われても困るよ。俺には俺の都合があるし」「いや、あの、ちょっと待ってくれ」恭平は井上くんにスマートフオンを差し出す。「弟が自分のファンと話したいって」

「ほんとですか」

嘘だがにっこり笑って頷いた。

「は、はじめまして。井上ケンタです」

スマートフォンを受け取った井上くんは、自分の名前を言ってから、『フィギュアキング』の今月号の弟のインタビュー記事を読んだことを告げ、『オバケデイズ』の食玩がどれだけ素晴らしいかを熱弁しはじめた。さらにはこれまで森岡人形のフィギュア事業部で制作した商品を言い募っていく。

「あ、はい。そうです。春休みにはぜひ。お願いします。いま代わります」

「俺のファンじゃあ、無下^{むげ}にできないな」

面倒くさそうな口ぶりは変わらないものの、電話越しの慎次はうれしそうだった。きっとニヤついているにちがいない。

「見学しにいったいいの？」

「来週の月曜はまだ春休みだろ。日本に戻って別件の打ち合わせがあるんだ。昼間の一時に代官山でどう？」

その旨を伝えると、三人は小躍りしてよろこんだ。

「よかったじゃんか、ケンタ。委員長だったらなんとかしてくれるって、俺の言ったとおりだろ？」

「ありがとう、田島さん」

「私はなんにもしてないよ。井上くんの気持ちが届いたんだって」

見学にいきたいと言いだしたのは荒川くんで、学級委員長の田島さんをお願いしたのだろう。恭平は羨ましかった。自分のためになにかしてくれる友達など、久しくないからだ。これから先もあるとは思えない。なんとも寂しい人生だが仕方がない。

「ところで兄貴」慎次の声があった。まだ電話は切っていなかったのだ。

「なんだ？」

「溝口さんが俺らの妹だって、ほんと？」

〈つづく〉